P−1−5 Livaditis法を施行したlong gap食道閉鎖症例の術後遠隔期の食道運動機能
聖マリアンナ医科大学 第3外科
石川 琢, 中田幸之介, 金 義孝, 藤岡照裕 江並朝猛, 桑原幹夫, 川口文夫, 山手 昇

【はじめに】我々は、これまでlong gap症例に対してLivaditis法を施行しその適応と術後の食道運動機能に付いて本学会に於いて既に報告してきた。最近我々Livaditis法施行症例の年長児が10例となったところで、食道運動機能を再評価した結果、多くの問題点を有するものの本法がlong gap症例に対する術式として有用と思われたので、遠隔期における食道運動機能の結果を中心に本法の実施時期、付加手術の適応等について考察を加えて報告する。

【対象及び方法】1980年以降当科にてLivaditis法を行った6例中術後5年以上経過した5例(A型3例、B型1例、C型1例)を対象とした。うち1例は新生児期一期の食道閉鎖、4例は食道圧迫伸張法と組み合わせ生後6～16カ月に二期的吻合を行った。2例には、複数の節屈切開が施行された。これらに対し、食道造影、内視鏡検査などにより食道運動機能を再評価した。

【結果】術後早期合併症としては、1例に吻合部狭閉内不全の保存的治療後の狭窄を除く筋層切開部の著しい拡張を認めた。胃食道逆流現象及び吻合部狭窄は高率にあり、狭閉狭は全例食道ブジーを施行し3例に逆流防止手術を行った。食道造影及び内視鏡検査では、筋層切開部の拡張が手術後2～3年は狭窄と相まって問題となった。しかし逆流防止術と狭閉狭ブジーによる狭化による筋層切開部の異常拡大は軽減し術後5年以降は固定化している。食道運動機能では、全症例で逆流収縮は低下し、内圧検査上は収縮が弱さを示し、噴門反射では1例に胃食道逆流による変化は少なかった。しかし食道造影ビデオによる観察では、立位において通過性は良好であり、食道運動機能の主な障害は筋層不全による食道内容のクリアランスの低下であった。この障害は複数節屈切開を行った2例に顕著であった。術後5年以上経過した内視鏡検査では、全例とも食道炎所見を認めなかった。

【まとめ】術後5～9年に至ったLivaditis法施行long gap食道閉鎖症例の追跡調査を行った。その結果これまでに報告してきた食道機能障害に、これに共通する問題に関わる症例はなく、心身の発達も良好で臨床上の問題は少なく、現在の日常生活に明らかな支障を認めていないうま。

P−1−6 Spiral myotomyを用いた多期食道延長術

1985年、我々は上下食道間の離断間隔の大きい食道閉鎖症例に対して、ランセン状筋縫閉切による食道延長術を用いた二期手術を考察し、離断間隔が5倍体に及ぶ症例(Gross C型、再手術症例)に施行したところ、食道延長がえられた。その後さらに4症例(3症例)に本法を施行したところ、有効な食道延長がえられたので、手術手技ならびに症例を報告する。

I. 手術手技

1. 第一期手術：頭部切開創を出した上部食道筋縫にランセン状(2/1/2回)切開をもし頭後部、ガイアン状を呈する筋切断面を6-0鎖合で縫合。延長された食道を、胃食道前を通って胸壁皮下に作成した皮弁を通過させ、適度の緊張を加えた状態で末端部を大胸筋内に縫合したものの皮弁食道延長とする。術後に終日投与ありミルクを食道端から回収し胃管を通じて注入する。

2. 第二期手術：数ヶ月の待ち延長した上部食道を縫合に戻し下部食道と共に縫合する。

II. 症例：症例はGross C型2例、B型2例およびA型1の5例で、上下食道の離断間隔は3～7倍体であった。一期手術時ランセン状切開で1～2cmの延長がえられた。二期手術待機中1例(A型、7倍体)に、一期手術数か月後、上部食道を皮下トンネルから剝離、再度緊張を加えたものの前位の食道端から3倍体前方の胸壁に新しく食道皮弁を作成し、合わせて4倍体の延長がえられた。下部食道の位置如何によっては再々延長術を考慮中である。

二期手術の終了した4例全例に胃食道逆流現象がみられ、逆流防止術が施行されたが、全例に吻合部狭閉を合併した。2例に吻合部切除食道再建が行われ、2例には食道拡張を施行中である。

Ⅲ. 検討：本法においては、(1)食道を用いた食道再建、(2)筋層の完全離断を避けるので機能が温存される。(3)筋層切断および延長による食道血行不全の合併症(食道閉合性延長、狭閉不全など)を回避できる。(4)筋層離断間隔が短いので栄養機能が温存される、および(5)多期手術により早と急の食道延長が期待される、などの利点がある。一方、筋切断の加えられた食道端端を用いるので吻合部狭閉を来たしやすいという不利な点がある。我々は、ランセン状切開を加えた食道の運動機能が温存されることを実験により確認している。本法は尚検討改良を加えれば、きわめて有用な手術手技であろうと思われる。